

わたしは、たいそう大きな村の長おきでした。妻はいましたが、子どもはいませんでした。わたしは村一番の狩りの名人で、毎年、たくさんごうえきちの毛皮や肉を交易地に運びました。船に乗り、海を渡って行きます。そのとちゅう、天にそびえるほどの高い山があつて、いつもそのふもとをたどって行きました。

ある年のこと、交易から帰って来ると、もう秋も深まっていました。わたしは、秋になつてからは、けつしてあの高い山には近づかないことにしていました。ところが、ある日とつぜん、あの山へ行きたくなつたのです。どうしたわけか、矢も楯たてもたまらず、船には何も乗せずに空船からふねのまま出かけました。水面みなもをすべるように進んで行つて、山の下まで来ると、船を岸に引き上げました。そして、ふと、わたしはいったい何のためにここに来たのだろうと思ひました。

わたしは、金縛りかなしばにあつたようにそこに立ちつくしました。日が暮れかかつてもつ立つていました。すると、夕暮れとともに、からすがたくさん集まつて来ました。あたりの山がからすでまっ黒くなるほどでした。

わたしは、食べ物を持っていませんでしたが、からすたちは、魚や肉を持って来てわたしのまわりに置いてくれました。わたしは、すっかりお腹が空いたので、その魚や肉をちようだいすると、急に眠くなりました。

やがて、わたしが眠りこむと、からすたちは、わたしの足もとから頭までびっしりとつまつて体を温めてくれました。それで、わたしはちつとも寒い目にあわないで、一夜ひじよを明かしました。

日が昇ると、からすたちはどこかへ飛んで行き、やがて、また、魚や肉を運んできてくれるのでした。

やがて、春になりました。

春もたけなわのある日のこと、めだつて大きなからすが側にやつて来て、大きく羽ばたいていました。

「アイヌのおかたよ。わたしのいうことをよくお聞き。この山は、海の精が守っている山だ。その海の精は、悪い神で、夫になる者を神々の中に探したけれど、いつまでたつて

も見つからない。そこで、アイヌの国を探しているうちに、おまえを見つけた。海の精は、おまえの心と姿にすっかり惚れてしまった。そこで、毎年のようにおまえがやって来ると、いつもおまえを見つめていて、いつかきつとおまえを夫にしようと思っていた。そして、とうとう、おまえをおびき寄せたのだ。こうしておまえはここで冬を越した。わたしは、おまえを絶対にあの化け物に渡すまいとした。そして、いま、あいつをひどい湿地の国に蹴落としたから、もう恐れることはない。さあ、おまえを送ることにしよう。わたしについて来るがよい」

わたしは立ち上がりました。そして、からすについて行きました。からすは低く飛ぶので、その下をどんどん歩きました。どこをどう歩いたのか、とにかくついて行くと、ずっと以前にわたしの狩場だった所に出ました。さらにどんどん行くと、とうとうわが家の側までやって来ました。

からすは近づいて来て、羽ばたいていました。

「わたしは、はしほそがらすの神だ。わたしは、おまえの心の美しさに、心打たれていた。おまえがしかやくまを捕ったとき、わたしたちの仲間が近づくと、おまえはきつと肉を分けてくれた。わたしは、それをいつもありがたく思っていたのだ。さて、今は、わたしはもう神の国に帰らなくてはいけない。だが、これからもわたしのことを忘れないでほしい。神々に祈るお終いでよいから、酒のしぼりかすやそまつな御幣でよいから、わたしのために供えてほしい。『これははしほそがらすの神さまにさしあげます』といって祭ってくれるなら、わたしは、いつまでもおまえを守りつづけよう。そうすれば、おまえは、もう何がほしいとも何が恐ろしいとも思わないでよい。子どももたくさん生まれて、国じゅうにくらべる者のない物持ちになるだろう」

そうして、からすは、飛び去りました。

わたしは、からすの後姿を何度も何度も拝んでから、家に入りました。

家では、妻が悲しんで、着物のそでを頭からかぶって、いろり端で寝ていました。わたしが、

「帰って来たぞ」といっても、妻は、

「だれが帰って来たというんでしょう。人の弱みにつけこんで、こんな昼日に悪い神がわたしをだまそうとするんだね」といって、見向きもしません。

「おい、帰って来たんだよ。ほんとうに帰って来たんだよ」というと、妻は、そでの穴からわたしを見て、やっと分かったようでした。

「あなたですね」とさけんで飛び起きて、死ぬほど泣きじゃくりました。

やがて、村の人たちがみんな集まって来ました。みんなは、

「たいへんだったなあ。たいへんだったなあ」と、わたしをいたわってくれました。わたしは、りっぱなお酒とりっぱな御幣を作って、はしぼそがらすの神をていねいにていねいにお祭りしました。

それから後は、何がほしいということもなく、何が恐ろしいとも思わないで、狩りに出かけ、交易に行ってもいつも恵まれました。子どももたくさん生まれて、こうして年をとったのですと、ひとりの老人が物語りました。

再話 村上郁

資料 『アイヌの昔話』 稲田浩二編／ちくま書店